

## 特別講演 2 SL2 私と集中治療・集中治療医学

西田 修

〔日本集中治療医学会 前理事長  
医療法人伯鳳会 東京曳舟病院 病院長〕

を超え、多くの集中治療科専門医を輩出した。同年4月1日、医療法人伯鳳会 東京曳舟病院の病院長に就任し、地域に密着した医療に取り組んでいる。

名古屋市立大学在学中より集中治療に関心を持ち、卒業後、当時世界集中治療医学会の会長であった青地修教授が主宰する麻酔・蘇生学教室に入局。以来、集中治療を軸に診療・研究を続けてきた。人工呼吸や体外循環に関する関心を持ち、自作 ECMO 装置を臨床に応用。卒後2年目の1988年、海外で肝移植を受け帰国後に多臓器不全となった幼児を、複数の輸液ポンプを駆使した新鮮血による交換輸血を行い救命。集中治療医学会シンポジウムで、日本初の生体肝移植症例と共に採択された。トロント大学留学を経て、2003年、海南病院でクローズド ICU を新設し、多職種チームによる集中治療を展開。重症例の救命を重ねた結果、地域内外から信頼を得、多くの若手医師・スタッフが集まった。翌2004年の集中治療医学会での公募セッション演題採択を契機に、委員会活動やガイドライン作成など学会活動にも関与するようになった。2008年には藤田医科大学で新たに教室と ICU を立ち上げ、教育を重視し多くの人材が集まった。2014年、集中治療医学会の理事に選出され、敗血症ガイドライン委員長などを務めた経験は、組織運営と人材育成の学びの場となった。2020年3月開催の集中治療医学会学術集会の会長に選出され、数年かけて準備を行っていたが、パンデミックの影響で会長を務める第47回学術集会の現地開催を断念し、社会全体が不安と混乱に包まれる中、第5代理事長に就任した。本学会が社会と国民にいかにして貢献すべきかを考え、「レジリエンスの高い集中治療医療提供体制の充実」の実現に向けて、国への働きかけを精力的に行ってきました。ロビー活動も含め、関連団体や行政、議員との対話など多方面へのアプローチを続けた。特に、医師届出票における「集中治療科」の追加、および専門医機構における「集中治療科（領域）」のサブスペシャルティ認定は、学会として長年目指してきたものであり、重要な節目となった。加えて、多職種による人材育成・認定制度の整備、行政との連携強化にも取り組み、学会としての社会的責任を意識した活動を進めてきた。スローガン「開かれた学会を目指し、社会と会員に対する学会の存在意義を明確に！」のもと、ダイバーシティ委員会や若手支援、研究推進、学会基盤システムの構築などにも注力。2024年2月に学会創立50周年の節目を迎え、3月に理事長を退任した。2025年3月、17年間主任教授を務めた藤田医科大学を定年退官。3名で立ち上げた教室は、延べ入局者は70名